

Sランク武偵 天羽斬々

遊び人の旅行記

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

緋弾のアリアの世界に女帝をぶっこんでみたかっただけの作品です。(笑)

よくある成り代わり転生ものなので苦手な方はブラウザバック推奨です。

目次

被弾したら緋弾の世界へ	
転生したら女帝でした(笑)	1
正義の鬼検事(遠山金又視点)	5
遠山家は必殺技の生産工場	9
武者修行に沖縄へ	12
琉球空手を使う奴は大抵化け物、はつきりわかなだね(諦観)	16
琉球空手を使う奴は大抵化け物(黒木視点)	19
東京よ!私は帰ってきた!!!	24
受験戦争(物理)開幕	28
受験戦争(物理)閉幕	34
受かった!受かった!夕飯は…病院食	40
教務科(マスターズ)からの採点	44
コンビ結成『鏝』	47
『鏝』の武偵	51
『無理』『無茶』『無謀』初任務は前途多難?	54
依頼内容は明確に記載願います	
探偵なんだから謎解きくらいするよ。	

「本当にできんのお？」できらあ！

61

一方その頃

—————

69

「まるでピクニックだな」お花見編

75

散らせるものなら…

—————

83

被弾したら緋弾の世界へ

転生したら女帝でした（笑）

鏡を見るとそこには色白な肌に長く伸びた黒髪、同じく黒い瞳には一切の光が宿っていない。

どうやら俺は武装少女マキャヴェリズムの登場人物、天羽斬々に転生してしまったようだ。

前世の俺は警察官で、巷を騒がせていた連続殺人鬼を追い詰めたが犯人が隠し持っていた拳銃から仲間を庇い死んでしまった。

本来ならそれで終わる筈だったんだがその銃弾は本来この世界には存在しなかったもので何らかの手違いによって犯人の手に渡ってしまったらしい。

その不手際のお詫びとして特典を与え、俺に相応しい世界に転生させてくれるというので俺は異世界転生もののお約束通りに神様？

からの提案に頷いた。

俺はそのまま健やかに育ち物心ついた5歳の頃、つまり今、鏡を見て状況を推理した
どうやら此処はマキャヴェリズムの世界だと。

だが、その推理は外れていた事を後日知る事になる。

「此処は刀剣類どころか銃火器の装備を認められた高校生がざらにいる、緋弾のアリア
の世界に転生したらしいと。」

神様（仮）は俺が前世で緋弾のアリアを読み、密かに武偵に憧れていたのを察してそ
の世界でも通用しそうなキャラクターを俺の記憶のなかから選出し、そのなかから世界
観を壊さずに過ごせる肉体を形成してくれたようだ。

確かに天羽斬々ならこの世界でも通用しそうだし、一応人間やめてもいない…筈だ。

これなら俺も人間最強くらいは目指せそうだ。

最初こそ性別が変わって混乱したが、前世でもそれなりに大人の経験を積んだ俺から
したら、大した問題はない。

俺はまともな成人男性だったので自分の体に一々どぎまぎしたりしないのである。

俺は早速一流の武偵を目指して琉球空手を習う事にした。

天羽斬々といえはやはり「上地流」による鍛錬で得た「自動反撃（オートカウンター）」
そしてその空手の究極とされる「化身刀（タケミカツチ）」の体現であるだろう。

最初こそ「全身を腕や道具を用いて叩きまくる」という異様すぎる鍛錬方法を親が許

すかどうか不安だったが、どうやら俺の両親はまだ俺が幼い頃に武偵としての依頼中に殉職したらしく。

今は養子として叔父夫婦に引き取られている、しかもその夫婦はただ俺の両親が残した遺産が目当てだったらしく俺の面倒をまるで見ない。

それどころか俺の男口調が気に入らないらしく仕方なく俺は原作準拠の喋り方を普段から気にかけることにした。

義理の弟が生まれてからは俺に暴力まで振るうようになり、それを見て育った弟まで俺を舐めてかかるようになった。

しかし、一応は養ってもらっている身として反撃する訳にもいかず。

最近ではむしろ「上地流」の修行になって却って良いのかも知れないと考えることにした。

朝は学校にも行かず家事や内職をしながら弟に殴られまくり、昼は母親のストレス発散に叩かれまくり、夕方までは自主鍛錬と夕飯の支度をこなし、晩は酔った父親に殴られる。

いや、幾らなんでも殴られすぎだろ私。

前世で痛みに耐える訓練をしていかなかったら自殺していただろう。

もしくは無事に育って後に犯罪に手を染める可能性すらあった。

あのものすごく速い右ストレートは俺じやなきや見逃しちやうので、まともに食らって死んでた可能性のほうが高いがな。

そんな生活も5年ほど経てば終わりを迎えた。

それもその筈、この世界には正義の味方が実在するのだから。

正義の鬼検事（遠山金又視点）

昔馴染みの凶報を聞いたのは仕事でアメリカに渡つてすぐのことだった。

高校を卒業してからはお互い忙しくなり顔を合わす事も少なくなつたが、それでも二人の結婚式には仕事をふけて顔を出しに行つたし、彼奴等も俺の結婚式に来てくれた、一生の付き合いというのはこういうものの事を言うのだと漠然と感じていた。

こないだだつて電話で産まれたばかりの子どもの事を話してくれた、お互い子育ては初心者で子どもの年が近いこともあいまつて良き相談相手になつてくれた。

子どもができて間もない頃、二人の武装探偵事務所には銃弾の紛失事件に関する捜査依頼が舞い込んできた。母親の濡羽はこの依頼を最後に武偵を引退することに決めていた、人伝に聞いた話でもそう危険な内容の依頼ではなかつたが、このご時世にたかだか銃弾の一発を探すのに警察がプロの武偵に捜査協力を要請することじたいがおかしかった。

二人は数日がたった頃から連絡が着かなくなり、その一週間後には銃弾に倒れた遺体が発見された。

一連の騒動は当時話題になつたが時間が経つにつれて人々の記憶から薄れていった。

武偵という職業がら殉職は珍しくなく、犯罪数の増加や未解決事件がざらにあるのだから当然といえれば当然なのだが被害者遺族を残して進んで行く社会の流れを強く実感した。

二人の子ども、天羽斬々ちゃんの事は心配だったが叔父夫婦に引き取られていると聞いていたのと、当時の俺は次期大統領候補の護衛という極秘の依頼を法務省から受けており自由に動くことができなかった。

仕事を終え帰国した後も、葬式に顔をだせなかった気まずさと、申し訳なさ、そして彼女に会うことにより嫌な記憶を思い出させてしまうかもしれないと恐れ躊躇っていた。

しかし、妻を亡くし悲しみに暮れる子ども達を見て、子にとって親がどれだけ重要な存在かを再認識し、数年ぶりに二人の子どもに会いに行くことを決めた。

会って二人の思い出話を聞かせ、どれだけ彼女が愛されて産まれてきたのかを話す義務が自分にはあると考えたからだ。

もし、二人が自分を残して先に逝ってしまったことを恨んでいたとしても、それは仕方のないことだ。

武偵とは報われぬ職業だ、幾ら過酷な訓練を積み自らを犠牲にして人々を救つても、そこに報酬が入るだけで便利屋としてしか認識さるない。

むしろ銃火器や刀剣類で武装していることで世間一般からは危険な存在として認識される事も少なくない。

だが、それでも彼等に救われた命があることを彼女には知っていてほしかった。

ただ、それだけの為に俺は彼女に会いに来たのだ。

だが、現実俺の想定していたものと違った。

彼女の身体中には無数の青痣が痛々しく広がっており、それは母親似の端正な顔つきにも例外なく表れていた。

現状を理解した俺は溢れでる激情を抑えながらできるだけ優しい声音で彼女、天羽斬々に家で暮らすよう説得し車に乗せた。

途中、義理の母親らしきものに止められたが少し殺意を向けただけで膝から崩れ落ちた。

そして夜に義父母が揃ったところで俺は極めて冷静に交渉に移った。

「まず、一発ぶん殴るところからだな、本気で殺るから男みせて耐えやがれ。」

その一言を金叉が言い終わる前に義父はその人間離れした殺気だけで、心停止を起こしていた。それに気づいた義母も金叉の迫力の前で口を開くことすらできなくなつて

いたがそれも無理はない。

「静かなる鬼（サイレントオーガ）」の前では誰も口を開くことはできないのだから。

遠山家は必殺技の生産工場

あの後、諸々の手続きを終えてから私は遠山家に引き取ってもらうことになった。

こんなに早く原作主人公である、遠山金次と顔を会わせることになるのは、予想していなかったが、一流の武偵を目指すとしたら私としては、遠山家に伝わる100の技は是非習得しておきたかった。

最初こそ壁があつたが、今では金次くんとも問題なく話せるようになった。

まだ新しい家族の空気に馴れていない私を気づかづかして、色々な話を聞かせてくれたり、習ったばかりであろう技を使ってみせてくれた。

今ではお互い心を緩しい、お互いの夢を語りあつたりまでした。

「俺は強くなつて、自分の大切な人達を守る武偵になる」

「今はまだ、この体質も上手く使えないけど、いつかは親父や兄さんみたいに使いこなしてお前も守つてやるよ……」

控えめに言つて良い奴である。

金次くんの兄である金一さんは、私と金次くんのあいだを上手く取り持ち、私と金次くんが仲良くなるのをてつだつてくれた。

度々調子に乗りすぎた金次くんに鉄拳制裁をくわえたりもしていた。

ちなみに金一さんは既にカナとしての自分を確立しており、私自身も女性としての立ち居振舞いを密かに見做わせてもらった。

カナさん曰く

「金次は不器用だし、時々頭が固くなりすぎちゃうことがあるから、貴女が傍で支えてあげてくれるなら安心だわ。」

と、これからも弟と仲良くしてねという趣旨の話をした。

弟想いの兄（姉？）である。

それから数日が経ち、私は今、二人の修行風景を眺めていた。

基本は父である金叉さんが修行をつけているが、仕事で家をあける時は祖父の鐵さんが二人の師匠をしている。

しかし、この人は私と祖母の雪津さんに隠れて「春水車」などのちよつとあれな技まで教えようとしており、このあいだ雪津さんにばれて諸に「秋水」を喰らっていた。

鐵さんが言うには、

「遠山家は自在に返對してこそ一人前！」

とわけのわからない供述をしており。

雪津さんから18歳を過ぎるまでそういった教育はしないことを約束させられてい

た。

よつて今は二人の自修を監督するに留まっている。

最初は私もただ眺めているだけのつもりだったが二人が実戦形式の組手を始めた頃、私は一度だけ金叉さんが二人に見せていた時、気づけば「絶牢」の構えをとっていた。意識して再現しようとした訳ではなく、自然と体が動いていた。

そして技の術理や用途、その派生までも体現するだけの才がこの体にはあると漠然と理解した。

それだけではない、金次くんが発案して見せてくれた未完成の技「桜花」や先ほど雪津さんが使った「秋水」も習得し、桜花に到つては完成させ独自の形に嵌めるまでに極めていた。

どうやら私は刀語の鑢 七実の「見稽古」のように相手の技を一度観ただけで体得、二度見れば万全に自らのものにする事ができるらしい。

この体、チートスペックすぎるだろ…

まあ、自分が強いことに越したことはないし、この世界普通に超能力（ステルス）とがあるから問題ないだろうと、私は楽観的に考える事にした。

武者修行に沖縄へ

遠山家に引き取られてから数ヶ月が経ち、家族の一員として認識された頃、私は非常に言いづらいお願いを金叉さんにしていた。

「本気で言っているのか？」

「なにか不満があるなら言ってくれば……」

金叉さんと雪津さんが私を心配してくれている。

当然だ、先日まで一緒に食卓を囲っていた亡き友人の娘が、いきなり本場の琉球空手を学びに沖縄へ武者修行に出たいなどと、宣いしたら誰だつて驚く。

私としても遠山家に感謝こそすれ、不満など「断じて」ない。

しかし、遠山家の技を習得した天羽斬々の身体がこれではないと、これでは本来の私の力を十全に引き出せないと語っている。

これから先、武偵になり任務（クエスト）をこなすようになるならこの違和感だけはなんとかしておきたい、確かに桜花や絶牢は自在に使いこなせるが、それはあくまで使っている域を出ないのだ。

「自動反撃（オートカウンター）」や「化身刀（タケミカヅチ）」のように、根幹の戦闘方

法を支えるものではない。

私の要点だけをまとめたシンプルスすぎる説明を聞いただけで金叉さんと鐵さんは認めしてくれた。

この二人は子どもの自立に理解があるようで、私の頼みを聞き入れてくれた。

金一さんと雪津さんも最初こそ二人と対立していたが、最終的には私の意思を尊重してくれた。

金次くんは折角できた新しい友達と離れるのが寂しいのか、暫く話しかけてくれなくなったが、これは私がなんの相談もなく勝手に決めてしまったのが原因なので仕方がない。

むしろ怒ってくれるほど、私に友情を感じてくれるのは嬉しくもあった。

沖繩行きの飛行機に乗る前日の夜、最後に金次くんと二人で武偵になった後の将来のことを話し合い親睦を深めた。

金次くんは

「次会うときには俺も親父や兄さんに負けないくらい強くなっているだろうから、そしてたら相棒（コンビ）を組んでお前のことも守ってやるよ、」

と、嬉しいことを言ってくれたので。

「私も金次くんが背中を預けられるくらいには強くなろう。」

と、少し自分の発言に不安になりながらも答えた。

それから少し時が経ち、私は沖縄で「上地流」琉球空手を数日で極めてしまった。

身に付けた、というよりは身体が思い出したと言ったほうがしっくりくるほどである。

「自動反撃（オートカウンター）」はもちろん、化身刀（タケミカツチ）も完全に我が物としていく。

習得して理解した、やはりこれらの技は天羽斬々の基礎スペックの一つであり、これらを習得していなければ遠山家の技を実戦で満足に使用することはできなかつただろう。

自動反撃（オートカウンター）に他の技を組み込んで対応力を上げたり基本の型稽古を復習しながら他の流派の技を見学して回っている。

そうこうしているうちに、私は怪腕流なる流派の噂を聞いた、流派と言ってもその使い手は現在一人しかいないらしく、その使い手が人間とは思えないほど強いらしい。

それだけなら噂は噂と聞き流していたのだが、この怪腕流の使い手は金叉さんとも知り合いらしく、その繋がりです顔を聞かせてくれた。

「此処が怪腕流の道場か？」

何故、空手道場の中から銃声が聴こえるんだ？

私は早速不安をおぼえながらも道場の門を叩いた。

琉球空手を使う奴は大抵化け物、はつきりわかんだね（諦観）

銃声のした道場の中を覗き見れば、そこには砂の詰まった壺を両手に掴み、その片手を前に突きだした状態で身長180cmを越える巨漢が佇んでいた、その壺は銃弾を受け止めたのか、割れて砂が床にこぼれ落ちてゐる、道着を着たその肉体から溢れ出る闘気は素人目にも見えるほどで、その男の身長を実際より大きく魅せていた。

その向かい側には対照的に、SAT隊員のような装備に身を包んだ男が腰を抜かして倒れていた、この男も背は高い方で道着の男よりも背が高いのかめしれないがまるで迫力が違うため、その身長を実際よりも小さく見せていた。

道場のなかには他にも見物客らしき人が二人居り、外国人らしき容姿の親子？がスーツを着こなした格好でその様子を観察していた。

私は混乱した状態のまま、おそらく金又さんから聞いた人物であろう目の前の道着を着た巨漢“黒木玄斎”さんに挨拶をしてこれからお世話になることを告げた。

挨拶を済ませた私はその後、頭を整理するために割れた壺の片付けをしながら師匠が前世で読んだ漫画、ケンガンアシユラの黒木玄斎である事をこの時ようやく理解した。

それから武偵校に入学するまでの数年間、私に修行を付けてくれる事になった。

それから数ヶ月間は基本の型稽古と三戦（受けの型）の状態で数日間飲まず食わずで耐えるといった修行を続けた。

人間は水を飲まなければ3日程で真面目に死ぬが、黒木師匠の顔が恐すぎて一切口答えせずに真面目に修行に打ち込んだ。

途中雨が降ったり、師匠が打ち水をする際に私にも水をかけてくれたので命を繋ぐことができた。

それから更に数ヶ月が経ち、遂に実戦形式の修行に移る事ができた。門下生は私一人なので、黒木師匠と二人での稽古になる。

最初こそ黒木師匠は寸止めで相手してくれたが途中からは私が死なないよう急所を外した場所には本気で打ち込んでくるようになり、数回死にかけた。

入門して一年が過ぎたある日、師匠は遂に「先読みの極致」であり、相手が攻撃する瞬間を見極め、その直前に動く技術である、

先の先、別名「無道」と

極限まで鍛えた手による貫手

「魔槍」

を習得した私を認め、怪腕流の免許皆伝を証明する書伝を授けてくれた。

「魔槍」は化身刀を身に付けている私にとっては、ただ速く突くだけの修行だと軽んじていたが、実際に黒木師匠と試合をしてみても、その速度の違いを実感した。

あれは謂わば反復動作の究極だ、条件を絞る代わりに型に嵌まれば最短、最速の絶技に変わる。

これの習得は私のチートスペックを有する体を持つてしても難しかった、センスではなく練度を要求する技である故、形だけ真似ても意味がないのだ。

「無道」に至っては何故かすぐに師匠に認められてしまい、私本人としては習得した実感がないので恐ろしく感覚的なものであるため完全に習得するのは無理ということなのだろうか？

とにかく、武偵高校に入学するまでにはまだまだ時間があるし。

これからは金次くんのように新技の開発に努めることにした。

琉球空手を使う奴は大抵化け物（黒木視点）

嘗て一度は殺しあつた知己から連絡が届いたのは、私が強さを求める旅から戻つてきて数日が経つた頃だった。

私は拳の求道に明け暮れ、徒手に置いて自分に勝る者との闘いを望んでいた。

しかし、その旅で得られたものは、もはや自分を越える拳士はいないのではないかという不安とそこから生まれる孤独感だけだった。

今や強さを求める者は銃や刃物、爆弾等の武器に頼り自らの身体を鍛えることを蔑ろにする傾向にあつた。

武器に頼るのは間違いいではない、それらに頼る者が弱いという訳では決してない。

それらの武器を使うのは人であり、使い方を決めるのもまた人である、それ故にその強さを決定づけるのは己自身の強さだ。

弱い者が武器をとつても弱い奴は弱いのだ、事実武器を持つて強かつた金叉は素手でも強かつた。

仕事で武偵と殺り合うことも多かつたが彼等は拳銃やナイフ等を武術として取り込んだアルカカタなるものを使う、金叉の奴は義理の娘に怪腕流をアルカカタに組み込ま

せるつもりで、この黒木に預けるつもりのようなのだが、我が怪腕流は凡そ常人がおいそれと身に付けられる代物ではない、それに私はまだ求道中の身であり他者を教え導くだけの余裕などはない、娘には悪いが適当にあしらい帰ってもらうことにした。

だが、道場にやってきたその娘は挨拶を済ませるや否やとつと先ほど修練で割れた壺を片付け初め、私が弟子は取らないと突き放してもまるで聞こえていないように、たちまち道場の掃除やこの黒木の身の回りの世話をしだすのだから、たまったものではなかった。

無理な修行を積ませて無理やり追い出そうと

「庭で三戦の型を私が良いと言うまで続けることができたら認めてやろう、途中で倒れたり型が崩れたらもうお前には何も教えない。」

と言つて、炎天下のなか数日にわたり放置しても彼女は諦めなかった。

途中に型が崩れていると言つて水を掛けても、もう何も教えないと怒鳴つても、彼女は諦める素振りを見せなかった。

そんな彼女に私も根負けして型の指導くらいならばと、面倒を見る事にした。

これ程の忍耐力があれば、わざわざ私の道場などに来なくとも充分に強くなれるだろうに。

当初はそう考えていた私だったが、彼女、天羽斬々の才能を視て考えを改めた。

あれは、100年に一人の天才だ。

私が教えた全ての技を瞬く間に吸収する為、あとは試合や実戦を積みせるしか教えられないことがなかった。

私との組み手でも最初は寸止めで済ませるつもりだったが、彼女は化身刀（タケミカヅチ）のせいで軽い打撃程度では回避する素振りを見せない、これではその身体を撃ち抜くだけの技を持った強者を相手にする際に致命的な弱点になる。

私は彼女の脇腹に「魔槍」を撃ち込み、その悪癖を正そうとした。

例え入院することになっても彼女が武偵に成るならば、この弱点だけは潰しておかなければ命をおとしかねないからだ。

しかし、その心配は杞憂に終わった。

彼女は私が「魔槍」を放とうとしたその直前には既に回避行動に移っていた、まるで最初からこの黒木の魔槍だけを警戒していたように。

金叉にすら私の「魔槍」のことは話していない、これを体得したのは私が旅にでた直後だ。

これを喰らい生き延びた者はいない、故に彼女が知っている筈がないのだ。

私はもう一度それを確かめる為、彼女の鳩尾に「足による魔槍」を撃ち込もうとした、今度は死んでも可笑しくない威力で、そうして疑問は確信に変わった。

彼女は私が見せた大きな攻撃の隙すら無視して大きく回避行動をとっていたのだ、彼女は受けても問題の無い攻撃と致命傷になりうる攻撃を完全に見切っている。

それは我が怪腕流に置いて「無道」と呼ぶ見切りの究極、先の先に他ならない。

世の中には遙か先の未来を直感と推理で予測する「条理予知」なるものも実在すると、まことしやかに噂されていたが。

この域に至った私ならばそれは可能であると断言できる。

私とて戦闘においてしか少し先の未来は予測できないが確かにそれは予知に匹敵すると自負している。

これはオカルト等ではない、経験から来る予測と戦士としての研ぎ澄まされた直感が掛け合わされば、例えば相手が気配を飛ばせる程のフェイントの達人でも惑わされる事はない。

そして彼女は既にそれを習得し、その精度と深さは既に私を上回っている。

それは、私に悔しさと同時に悦びを与えてくれた。

「無道」は未だ完成に至っていない、それはこの黒木もいまだ成長途中であることの証明に等しかったからだ。

長く険しい武の頂きへの道は、それでも決して孤独へ通じる道ではないと彼女が証明

してくれたような気さえした。

「まさか、10年以上離れた少女に励まされるとはな。」

「天羽斬々、その道を、共に歩めるだけの強さを持った仲間恵まれることを願う。
果ての無い道に、光を見出だした男の話だ。」

東京よ！私は帰ってきた!!!

金又さんの凶報が届き、急遽帰る事になった私はどんな顔をして家族に会えばいいのかわからなかった。

原作どおりに話が進んでいれば、遠山金又は擬奇屍を使用して生き延びているが、私が介入したことによりバタフライエフェクトの様な事が起きて万が一にも金又さんを死なせていたとしたらと考えると背筋が凍る。

「頼むから殺してくれるなよ、伊藤マキリ……」

私は飛行機の中で、誰に聞こえるでもない一人言を呟いた。

飛行機が着陸した後、空港では鐵さんと金次くんが迎えに来てくれていた。

タクシーに乗り込んでから鐵さんが経緯を話してくれた、どうやら金又さんの死体はまだ確認ができていないらしく、それを聞いた私は安心した。

少なくとも生き延びた可能性が残っているならば、後は遠山金又という武装検事を信じるだけだ。

鐵さんと金次くんは、自分達の方が辛いだろうにまずは私の心配をしてくれた。

二人だけではない、私は遠山家の優しさに生かされてここに居る。

私は、この家族に何も返せていない。そう思うと、とてもいたたまれない気持ちになり悲しさと情けなさで涙が溢れそうになる。

そんな私を氣遣つて隣の金次くんが私の手を優しく握つてくれた、自分の方が辛いだろうに、彼はいつも自分より他人のことを優先してしまう。

それに甘えて、私が泣くわけにはいかない。

私は金次くんの手をそつと握り返した。

葬儀は遠山家で行われた。金叉さんの同僚と星伽の人間が数名、後は嘗て金叉さんに救われたという大勢の人達がご焼香に来ていた。

私も遠山家の人間として、芳名帳を記帳してもらかう受付の役割をさせてもらった。

その際に、伊藤マキリが葬儀に顔を出して来ていることを確認した。

何食わぬ顔で芳名帳に記帳して、ご焼香を終え帰つて行こうとする。

私は気づけば彼女の背中を追つて走り出していた。何故そんなことをしたのか自分でもわからなかった。問い詰めようだとか、ここで敵を討とうとしたわけではなかったと思う。

それでも私は彼女の背中にこう問いかけた。

「意味はあつたのか？」

彼女は私の問いにただ目を細めて、街灯ひとつない夜の道に消えていった。

私は暫くそこに立ったまま動けずにいたが、私を追ってきた金次くん連れられて家に帰った。

その日の夜は眠れなかった。

私が縁側で夜風に当たっていると金次くんがやってきた、彼も眠れなかったのか暫く無言で私の隣に座っている。

その沈黙げ少し心地好くもあつたが私は彼に話題を振る事にした、具体的には沖縄での生活や修行の事、黒木師匠の事まで話した。

伊藤マキリの事や金又さんの話題は避けて。

金次くんも私がない間の遠山家の話しをしてくれた。

金一さんと鐵さんで宴会芸で銃弾撃ちをした話しや金一さんとの頭突き勝負等の面白い話した。

彼も金又さんの話題は避けて。

もうすぐ受験シーズンがやってくる私は修行の仕上げにもう一度沖縄に戻る。

次に会うときは東京武偵高校の受験日だろう、

「HSSはまだ使いこなせてないんだろう、馬鹿な女どもに言いように使われてボロ雑巾のようになるよ、遠山金次。」

「はっ、どの口が言ってたよ。これでもヒステリアモードにならなくても武偵中では

それなりに活躍してんだ。」

「ふふ、それでいい、周りに女がないせいで桜散るなんてことにはならないでくれよ。」

「上等だ、散らせるものなら、散らしてみやがれ。」

私は金次くと再会の約束をして布団入った、その日はとても幸福な夢を見た気がしたが、朝起きたら忘れてしまっていた。

受験戦争（物理）開幕

桜が咲く季節になり、私は東京武偵高校への入学試験を受けに来ていた。

「金次の奴、遅刻か…」

たしか原作では絡まれている星伽白雪を助けに入っていたから、その為だろう。

私は先に校門をくぐり申し込みを済ませて強襲科の試験を受けに行く。

パンフレットを開き、受付の案内で聞いた場所へ近づくにつれ、硝煙の匂いが立ち込めていく。

私は一般中からの編入試験という形になるので、まずは使用する銃を「装備科」の棟まで受け取りに行かなくてはならなかったから少し面倒だった。

途中、「装備科（アムド）」の試験会場へ向かっているであろう平賀 文さんに道を聞かれたりしながら、私は担当の先生であろう、女性から頼んでおいた、コルト・ディテクトイブスペシャルを受け取り戻ろうとしたが、装備科のお手伝いさんらしき外見になんの特徴もない男から「紅い自動拳銃（レッドホーク）」を妙に薦められて、押しに弱い私はそれも受け取ることになった。

それにしてもこの学校、特徴的な人達ばかりだからあれだけ特徴がないと逆に目立つ

なあ、私も端から見ればあんな風に目立っているんだれうか？

：否、見た目は天羽斬々の其れなのだからその心配はいらないと思うが。

沖繩のライフル射撃場で少し練習した程度の私は、前世で警官だったとはいえ人に向けて銃を撃つことにまだ少し抵抗があり、「強襲科（アサルト）」の試験で活用できるか不安が残っていた。

試験開始の時刻が迫り、試験会場の廃ビルのような場所へ行くと既に周りには受験生が集まり、型の見直しをしたり、精神を落ち着かせたりと、各々のルーティンに集中していた。

私も緊張を解すために銃弾の点検でもしようかと考えていると、一際目を引くイケメンが私に話しかけてきた、確かこの人は不知火 亮という金次の親友になる予定の男だ、確か彼も一般中出身のはずだったので、私と通じるものがあるだろうと思い少しだけ話してみると、中々に礼儀正しく、初対面の他人と話すことが苦手な私でも気軽に話せるだけの人の良さがあった。

「お互い合格できたら、チームを組むこともあるかもしれないから、その時はよろしくね。」

「ああ、そうだな、その時はよろしく頼む、不知火 亮……」

人見知りを発揮しながらも不知火くんと話しているうち時間が過ぎ、長いポニーテ-

ルを纏めて、スーツを着崩したガラの悪そうな女性、「強襲科」の教諭。蘭豹が現れた。試験内容は各自廃ビルの持ち場に着いて時間までに他の受験生どうしを潰し合わせるといふものだ。

それ、なんて蠱毒？

だが私も転生してからずっと研鑽を積んできた身だ。

ヒステリアモードになった金次くとぶつかるまえに他の受験生を捕縛して点数を稼いでしまうくらいはできる自信がある。

私は早速後ろから跡をつけてくる者の気配を察知して攻撃に移る事にした。

私は飛んでくる銃弾を横に跳んで避けて、そのまま建物の柱で射線を切りながら移動し部屋を出てすぐに隔てる壁を殴り壊し、慌てておつてきた追跡者の不意をつき、ものすごく速い手刀で相手の意識を「断った」

それを監視カメラ越しに観ていたある一人の教諭は後に語った。

「恐らくだが、とてつもなく速い手刀だ…私でも見切れなかった…（・c | ・、）」

受験戦争（物理）

私は他の受験生を倒しながらこのビルの構造を観察していた。

受験生はこの試験を受けるにあたり、上から順に詰めるように教諭に配置された為、遅れてきたであろう金次くんはまず間違ひなく下から上に登るように迫って来るだろう。

私としては、金次くんを相手にするのはできれば最後にしておきたかった。

ヒステリアモードの金次くんを相手にしながら他の受験生からの不意打ちに気を配るなんて器用な真似は流石に出来ないのです、必然的に私も上に向かう階段を登る。

途中にいる受験生を潰してまわっていると峰 理子のいる階層にぶつかつた。超能力（ステルス）を使わない理子の相手自体は簡単だったが、途中に張り巡らされた罠を掻い潜るのは面倒で特に理子を囲うように張られたワイヤートラップは、私でなければ動脈や手足の筋を切られて武偵としての生命どころか人命を絶たれる程のものだったが、あまり時間を掛けられない私は全ての罠を強引に突破して進み防弾チョッキ越しの銃撃は全て避けずに受けることを覚悟し勝負に出た、捕縛する際に理子が暴れて腹部や肩口には2〜30発程銃弾をくらってしまつた。

ごり押しチンパンジーもしくはバイオハザードのタイラントと化した私に唾然としていた理子の腹に、前世で読んだ「武装少女マキャヴェリズム」の主人公が使用する技「魔弾」の試し撃ちをさせてもらったなら一発で気絶してしまった、流石はこの天羽斬々の肉体にダメージを与えた技だけはある。

前々から修練に励んでいたかいはあり、今では雲耀の域にまで達している。

まさかこの身体で使用できるとは、ある意味では感慨深くもあつた。

私は理子を安全なビルの隅にまで移動させた後で屋上へ向かつた。

影に隠れていた教諭等は残して置いたので、勘違いした金次くと戦えば少しは体力を削ってくれるだろう。

しかし、驚くことに、私が最上階の掃除を終わらせた直後にはもう金次くんは私以外の人間全てを捕縛、もしくはは気絶させてきたようだった。しかしそれより驚くべき事は、

「思ったより早い到着だったな、遠山金次」

私が金次くんを褒めると。

「まあな、途中に怪しいおっさんどもの相手に時間をかけちまってなあ、埋め合わせにキスでもしてやろうか？」

と、妙に俺様な口調になっていることである。

何故か今の彼は通常のヒステリア・ノルマーレではなく、女性を他の男性に奪われた際のヒステリア・ベルセの状態だった。

何故、彼が今ベルセの状態になっているのかまったくもって☆意☆味☆不☆明☆だったが、少なくとも今の彼は通常のヒステリアモードよりも1.7倍強く、なおかつ攻撃的な性格になった為、状況把握に問題がでている筈だ。今の彼なら女性にも多少の乱暴をしかねないので私のアドバンテージが一つ消えてしまった。

私が考えを纏めていると金次くんは既に攻撃に移っていた。とつさに三戦の型をとった直後に腕に衝撃が走った。

「くっつ……これは桜花か」

まだ、痺れの残る腕に力を込め直し対峙する。

今の攻防で確信した、彼は捕縛などといった甘い考えは捨てている。

無理矢理にでも私を振じ伏せるつもりなのだろう。

ならば私も覚悟を決める。彼とこれから先も競い合い、隣で戦い続けようというのなら、ここで退くわけにはいかない、もてる全てをもってぶつかりあう。

「逝くぞー！遠山金次!!」

次の瞬間には互いの拳が交差していた。

受験戦争（物理）閉幕

初めの攻防は私の有利に進んでいた。ヒステリア・ベルセの金次くん相手でも、近接戦闘では私に分があつた。

「桜花」や「秋水」のような技にだけ注意していれば、あとは私の「自動反撃（オートカウンター）」でじわじわと削つていけばいいだけだ。

しかし彼も馬鹿ではなく、思考が攻撃一辺倒に偏つていてもその攻撃手段を変えるだけの冷静さは残つていたようだ。

彼はベレッタM92Fとバタフライナイフの「色金止女」を用いて私の武装解除にかつた、要するに私にダメージを与えられないので防弾チョッキや拳銃等の装備を私から切り離して端から見て無力化させるつもりらしい。

「そんなつまらん決着には、断じて、させん！」

私にとって、そんな装備は只の飾りに過ぎない事は彼も理解しているだろう。

私は金次くんに崩された体勢を立て直す為に咄嗟に距離を離してしまつた。

その瞬間彼は後ろに飛び退きベレッタの間合いから銃弾を連射する、しかし私の身体は防弾チョッキ越しの銃弾の衝撃程度で怯みはしない、それは理子戦で実証済みだ。

だが、金次くんの狙いは私の胴や足ではなく、外したように見せた弾丸による跳弾射撃（エル）を私の膝裏に吸い込ませることにあった。

名付けるなら「跳弾膝カックン」といった所か。

いや、まんまやんけそれ。

並の人間なら武偵生命を絶たれるぞ、それ。私でも膝が割れるどころではすまないだろうそれを避けたのは偏に変態シューターの金次くんが銃弾を外す筈がないという信頼ありきだった、故に私はそれを避けることに成功した。

しかしそれも想定していたのか金次くんは私の避けた銃弾を更に撃ち返して一人銃撃ち（ひとりビリヤード）による多角的射撃を私にお見舞いしてくれやがった。

やっぱ化物だわ、原作主人公。

ダメージ覚悟に突っ込まなければ距離も詰められないとか、こいつ本当に人間か？

だが私も武偵を目指す身、ただ突撃するだけが日本人ではないのだ。私は近接武器を解禁した。

それは遠心力を用いて扱い、尚且つ人間の最も優れた投擲能力を遺憾なく發揮し持ち運びも楽であり職質にあっても誤魔化しやすい暗器としても人気の高い小型の鎖分銅である。

私はこれを用いて一人銃撃ちの弾丸を「HUNTER×HUNTER」のクラピカ

よろしく全ての弾丸を鎖で受けとめた、結局脳筋じゃねえかよ…

私は空中で身を捻り、驚愕に目を見開く金次くんの腕に鎖を巻き付け勝負を決めにかかると。

強引に彼を間合いにたぐりよせ怪腕流の「魔槍」を自分の型に昇華させた手刀、「魔刃」自らの手によって大地に千〃刃〃の谷を創らんばかりの手刀という意味で名付けた、もちろん比喩表現だが、を金次くんの異常に硬い頭蓋にむけて振り下ろした。

大丈夫だ、遠山家の頭蓋骨はこの部分だけギャグ漫画の世界なんじゃねえの？と疑う程に頑丈にできているので軽い脳震盪で済むだろうと割り切った渾身の一撃は、金次くんの真剣白羽取りと「絶門」により防がれた。

「なッ?!…馬鹿な!!」

この主人公まさか私が数年かけて名前を考え、昨日完成させた技をこうもあっさり防ぐのか!

それが人間のすることかよおおおお!Σ(×|×;)!

しかも私の魔刃の衝撃を受け、老朽化の進んでいた床はひび割れて穴が開き私達は一つ下の階にまで落下中である。

しかも、金次くんはその間も私の手を離さずに合気道の要領で私の関節を破壊しにかかると!

☆HANASE☆!!

私は足による魔槍で金次くんの腹部を突き刺し無理矢理離れる。

空中だったのでお互い体勢が悪く先の魔槍も決定打に欠けていた、勝負は着地してから決まる。

ほぼ同時に地に足を着けた私達だが体重の分、金次くんが先に動けた、着地地点に先回りして無防備な私に渾身の「桜花」を叩き込むつもりようだ。

必死に回避しようと私の左手は回し受けの構えをとるが、それもろとも突き破り「桜花」が私の胸に吸い込まれていく。

この時を待っていた。

「桜花」弾けず、狙い澄ました「小手返し」によって金次くんの右腕にダメージを返した。利き腕を潰した以上、あとは消耗戦で私に軍配が上がるだろう、私は痛みに呻く金次くんに何故か反射的に「正拳六連撃」を打ち込んでしまうも、彼はまだ倒れない「絶門」でも使っているのか？

外では急に雨が降りだしたのか、ビルの中に雨の音が響く、ポタポタと雫がここにも垂れてきたのか雨水が私を濡らす、何故だか急に沖縄で師匠の道場の庭に成っていた柗榴が食べたくなかった、三戦の修行中に熟れ落ちた果肉が地面で潰れる様をみて水分を欲していた私は喉を鳴らしたものだ、いや違う、何故今そんな事を思い出す！

頭を振って意識を覚醒させた私は前頭部から血を流している事に気づいた。

どうやら私が金次くんの右手を破壊した直後、彼は「秋水」によつて全体重を頭突きに回して私の頭蓋を割りに来たらしい。

しかし、「自動反撃（オートカウンター）」による反撃を受けて、私に止めを指すことができなかったのだろう。

すぐに反撃にでないところをみるに、ダメージの深さはお互い様なのだろう、次の一撃で勝負を決める。

「絶牢」は遠山家の秘伝であり他人に見せられない以上カウンターは得策ではない。

故に最大の攻撃で勝負を決める！

私は用いる最大威力の必殺技「魔刃」×「桜花」∥「魔葬」を用いて金次くんの胴体を防弾チョッキごと断ち切る。

勿論、殺さないように傷は浅くするつもりだが、多少の出血は覚悟させる。対する金次くんは「絶牢」でも「絶門」でもない構えをとり、私に集中する。

何をする気かは知らないが、諦めていないことはその目を見れば分かる。

「いいぞ、遠山金次！もっと私に集中しろ!!私だけを見て、私だけを感じ、私だけの奴隷となれ!!」

ライバルとして、全力をぶつけ合おうと宣言するつもりが、稀に熱くなるとこの身体

は天羽斬々のようなセリフに変換されてしまうので、私は内心すごく恥ずかしくなりながらも、それを誤魔化すように「魔葬」を放った。

受かった!受かった!夕飯は…病院食?

「魔葬」が金次くんの右腹部から左脇にまで切り裂こうと迫るなか、彼は脱力させた全身に一瞬で力を含め逆ベクトルの「桜花」である「橘花」を用いて私の一撃に併せて“回転”した、そしてそのまま私の左側頭部にむけて「桜花」による蹴りを放ってきた。

その技の構造上「絶牢」に近いが厳密には違う。第一に私の魔葬は彼に触れてもいない、攻撃の進行方向を見極めて「橘花」を用いて回避し、その勢いを殺さずに更に「桜花」を重ねて攻撃に転じる技だ、攻撃の進行方向を予め見極めなければ使えないように「絶牢」のように相手の力を利用できないが、「魔葬」のようなガードや受け流しが不能の大技には有効だろう。名付けるなら「春風車」といった所か。

私は放たれる蹴りを同じく「橘花」で受けながらも金次くんの足を掴み、殺しきれない衝撃はそのまま勢いを殺さずに「秋水」の体重移動を用いて相手の体をコンクリートの床に叩き付ける、名付けるならば「人間ベイブレード」といった所だ。

あらかじめ橘花×絶牢×桜花の流れを警戒していた私にはその技を称賛こそすれ、驚きはしなかった。

ほとんど勢いは殺したとはいえ「春風車」と私の「秋水」を乗せた一撃を受けても尚

どうやら金次くんととの戦いで頭を強く打ち過ぎて脳震盪に陥っただけでなく、頭部からの出血による貧血まで引き起こしたらしい。

まあ、それ以外は無傷だし、頭の包帯が取れば退院と言っていたので暫くは経過観察だろう。

隣では左手と左足首を骨折した不知火くんが同じくベッドに寝ていたので、やはり私達一般中組では彼らの様に危機管理能力には長けていないらしく、どうやら足場の不安定な場所での行動は慣れていない為に階段で滑って転んでしまったらしい。

不知火くんも結構お茶目などころがあるんだなと思った。

金次くんは目を覚ましてすぐに、何故か私に試験での事を謝りだったので、私は気にしてない事と、手加減されるのは不本意だったから寧ろありがたいと感謝したら、彼もようやく顔を上げてくれた。

彼もビルの床に叩き付けられた際に肋骨にヒビが入っているし、右手首は私の「小手返し」の所為で包帯が巻かれており、最後の「魔弾」で後頭部が出血した為、軟膏を塗ってガーゼを貼られている。

パッと見た感じでは、彼の方が入院すべきような有り様だが、私の様に急所である脳や心臓にも影響はないし、不知火くんの様に自分で歩けない訳でもないので、暫くは自宅療養のようだ。

不知火くんは何故か終始冷や汗を流し震えていたが、そんなに骨折が痛むのかな…。それに、私が彼に金次くんを紹介しても、あまり会話をしなかったようだし…。そんな人見知りだっただろうか？

寧ろ積極的に交友を拡げるタイプだったような気がしたが…。

2日程休めば包帯も外せ、不味い病院食とも今日でお別れだ。

退院する際に「救護科」の教諭である矢常呂イリンさんに、

「もし、何か身体に異常ができれば戻ってきなさい」と言われたが、やはり私の脳に何かしら問題でもあったのだろうか？

私はその後、一度遠山家に戻り、金次くんと合格発表を待った。

「遠山金次 入試Sランク」

「天羽斬々 入試Sランク」

桜咲き、私達の東京武偵校での生活が始まる。

教務科（マスターズ）からの採点

―蘭豹視点―

暫くにわたって強襲科の試験官を務めているウチでも、今年のように突出した戦闘能力を有した受験生が二人も同時に現れたのは嬉しい誤算だった。

遠山金次については彼奴の通っている武偵中での活躍を聞いて注目しとったけど、予想を遥かに上回る射撃の性能と格闘センスは天才の域に達していた、最初こそあいつの父親や兄貴に名前負けしとると思うたけど、ふたを開けてみれば今後の訓練しだいで化けるダイヤの原石のようなガキやった。

性格も私好みの、今時珍しい中々に度胸のある奴で、遅刻して来たくせに挨拶もせんで他の受験生共に睨みを利かせたと思つたら、私に試験内容だけ聞いてとつとと装備の着用に行きおつた。

「強襲科に入つたらまずは口の聞き方とあの嘗め腐つた態度を叩き直さんとなあ…」

これから奴をどう鍛えて（痛めつけて）やろうかと考えていると、もう一人のSランク合格者、天羽斬々についての資料が目にはいった。

こいつの扱いは教務科（マスターズ）のあいだでも問題になつとつたっけなあ…

遠山金次以外の受験生をほぼ無傷の状態で制圧して周り、話を聞く限りでは試験官が潜んでいることにまで気づいていたらしい。

装備科での射撃テストではAランク止まりだったがビルでの攻防を見るに、こいつの戦闘スタイルは鍛えぬいた肉体によるダメージを無視した強引な制圧と研ぎ澄まされた技と感覚による緊急回避能力にある、一見矛盾した戦闘論理だが彼女は急所や他の僅かな部位以外の攻撃は当然の様にはじき返し、更にはカウンターに移れるだけの耐久力を有している。攻撃面でも、その手足はもはや刀の域に到達しており、手刀や足刀で他の受験生の銃や刃物を破壊してみせたほどだ。

それに、彼女は武術における先読みなのか、心理学による推理なのかは知らんが、致命傷となり得る攻撃には全て反応し対応しとるし、当初懸念していた死角からの攻撃や狙撃にも、遠山と殺りあつた際に使つた分銅鎖で対応しているんやろうな。

以上の結果だけみれば誰も彼女をSランクにすることに反対せんやろうけど…問題はこの「銃弾」か……。

試験の後に、頭からの出血が中々止まらないので救護科で手当てを受けさせ、念のためにと脳のレントゲンを撮つてみた結果、彼女の脳の中樞に銃弾が発見された。

脳に銃弾が撃ち込まれて生存している例は珍しくない、「探偵科（インケスタ）」の教諭である 高天原 ゆとり も戦えない体にこそなつたが普通に生活している。

しかし問題は彼女の頭に銃創の痕はなく、記録にも載っていないことが教務部からの疑惑を抱かせた。

遠山家の人間や本人ですらその存在は知らなかったらしく、詳しく調べる為に天羽斬々には経過観察と伝えて暫く入院させた。

調べた結果その銃弾は金属製の外殻を除き全てが有機体であり、生きていることが明らかになった。

そんな不気味な存在を有した彼女を入学させて良いのか教務科でも意見が対立し一触即発の状況のなか急に現れた、否、最初から居たが誰も分からなかった男、緑松 武尊 東京武偵高の校長が、彼女「天羽斬々」の身元を保証すると提言した。

「誰か彼女の入学に反対する方はいますか？」

皆無であった。

一連の流れから『見える透明人間』緑松武尊と天羽の両親の間には何かしらの関連があった事が窺える。

「天羽斬々……いつも中々に手が掛かりそうやな……。」

そして、彼女は何カ月ぶりに座ったデスクから離れ、強襲科の戦闘訓練を冷やかに向かった。

コンビ結成『鑿』

『鑿』の武偵

入学式当日、私は鏡の前に立ち防弾制服の乱れがないか確認する。

金次くんに食らった頭突きの痕は残っていないようで安心した、別に私は残ってもよかつたが、優しい金次くんはずっと気にしてしまうのだろうかからきれいになおってよかった。

頭に埋まっている弾丸は深すぎて手術で取り除くことは困難とのことだったが、確かに前世で死んだ原因も銃弾を撃ち込まれての事だった筈だ、それと何か関係が有るのだろうか？

まあ、深く考えても分からないし。これまで通りに気にせず生活することにしよう。私は遠山家で皆と朝食をとったのちに金次くんと学校に向かうことにした。

金一さんも私の身体の事を心配してくれたのか、珍しく家に帰っていたので。家族写真を撮って携帯の待ち受けにする。

金次くんは恥ずかしかがっていたが私が無理やり巻き込んだ。

東京湾に浮かぶ人工浮島、学園島に入り学校に到着した私たちは入学式の為に一般校

区の体育館に向かった。

入り口で受付を済ませた後に金次くと別れて席に着く、武偵高校の入学式といつても退屈なもので大した驚きもないだろうと思っていた私だが、校長であり、この東京武偵高校でもっとも危険な人物、緑松武尊がスピーチを始めた際にその顔が受験当日に装備科の棟で出会ったお手伝いの用務員さん（仮）であった事には思わず驚愕で目を見張った。

入学式終了後に体育館入り口の前に貼られたクラス分け表を確認する。

結果は金次くんと同じA組で安心した、それはつまり担任が比較的に温厚な　高天原ゆとり　さんである可能性が高かったからだ。

蘭豹や南郷といった教諭が受け持ちだったらまともに一般教科を受けられない可能性すらあったので、これは素直に嬉しい。

「やったね…金次」

私はこの幸運がわかっていないであろう友人に喜びを伝えた。

金次くんも、頬をかきながら私に一応の同意をしてくれた。

一般校区に向かった私達は『I—A』とついたプレートの教室に入った、そこには

星伽　白雪、峰　理子、武藤剛氣、不知火　亮、レキといった原作主要人物がこれでもかというほど詰め込まれている。

後に『鏝』と恐れられる二人の武偵が誕生した瞬間である。

『無理』『無茶』『無謀』初任務は前途多難？

私と金次くんのコンビ『鑿』が結成されてから数日が経ち、強襲科の授業にも慣れてきた頃に蘭豹から私に呼び出しがあった。

「また、何で俺まで付き添わなきゃいけないんだよ」

と、不平を垂らしながら付いてくる金次くん

「『鑿』として呼び出されたんだからしょうがないだろう」

と、だけ返す。

校内放送では私の名前だけ呼ばれていたが、それは私達が前に蘭豹から「コンビ」として呼び出されたとき金次くんが校内放送で呼び出す際にコンビ名で呼ぶのはやめて欲しいと、まだ蘭豹の恐ろしさを知らない金次くんが文句を言って「捻られ」ていたのを私が、

「彼はこの私の所有物だ、用事があるならば先ずは私に連絡を」

と、神をも恐れぬ発言をしてしまったので、それ以来訓練中は彼女の遊び相手（サンドバッグ）になることを引き換えに私だけ名前前で呼び出されるようになった。

今では金次くんなんかほっといて蘭豹にしばかれている様を携帯にでも撮っていれ

ばよかったと後悔している。

一般校区から強襲科に入るとすぐに蘭豹を見つけた、呼び出すなら場所くらい指定しろよと思いつつも用件を聞く。

「武偵は行動に疾くあれ！来るのが遅いぞ問題児どもが！」

「今回お前等と呼んだのは民間からの依頼でお前等コンビに指名があつたからや、心して聞け!!」

来るのが遅いのはあんたが場所指定しなかつたからだろ、いや、それよりも。

「何故、民間から指名があるんです？」

「私達は先日にもコンビを組んだばかりで他に依頼など受けていませんが、」

と、純粋な疑問をぶつける

「別にお前等の名前で指名が入ったんとちゃうは、新入生のなかで一番優秀な強襲科の生徒として呼ばれとるって話や。」

「まあ、要するに今のうちに睡つけとこうつちゆう事やな。」

なるほど、それなら私達が指名されるのにも納得だ。

私達控えめに言つても、同学年では最強だし。

「それで肝心の依頼内容やけど、お前等『考える木』って組織は知つとるか？」

それは何処かで聞いたな、確か

「自然保護を看板に掲げた反社会的宗教団体、教祖は『花御御前』と名乗り不特定多数の信奉者に囲われ、その身元は不明。」

だった筈だが、目で蘭豹に確認をとると

「そうや！よう調べとるやないか天羽！その組織では今まででも違法薬物の摘発なんかで武偵校でも何度か現場をあらつとるんやけどな、蜥蜴の尻尾切りで組織の解体には至つとらんのか…」

「その組織の幹部と思わしき人物から依頼主の娘が命を狙われとるらしくてやな、その対象を護衛して欲しいっちゅうのが依頼や。」

なるほど、中々に重い依頼だが、ふと蚊帳の外になっている相棒を横目に見ると。

「受けようぜ、天羽」

どうやら私と同じ結論のようだね。私は蘭豹に護衛対象について聞いた。

「護衛対象の名前は『花御咲羅』またの名を『花御御前』、教団『考える木』の教祖様や。」

どうやら、私達の初任務は一筋縄では行かないらしい。

依頼内容は明確に記載願います

依頼主との顔合わせの為に、東京から少し離れた山間部の宿泊施設まで向かった。『考える木』の拠点は幾つかの広大な土地を有している。

この一帯の山もその例外に漏れず、私達が今向かっている宿泊施設も近隣の小学校や中学校が林間学校として利用していたものだったのだが、数年前に地震が起き、近年の少子化問題も相まって施設の経営が続けられなくなった建物を『考える木』の創設者である今回の依頼主が買い取ったようだ。

「それにしても、何処からそれだけの資金を集めたんだ？」

「たかだか個人が創設した独自の宗教団体だろ？」

と、金次くんが尤もな疑問を投げかける。

「最初は小さな宿舎だったらしいが、投資で得た金で土地や建物を買ってそれを身寄りのない人達に無料で貸し与えたそうさ。」

「他にも仕事を紹介したり、内職を手伝わせたり、働けない人には土地や建物の管理を任せたり、他にも専門知識や資格を持っている者にはインターネットを使った布教活動等も手伝わせているようだ。」

「尤も、それだけでこれ程の資金は得られないだろうからな、後はお察しだ……」
私が事前に調べた情報を金次くんと共有する。

「そういえばこの前に駅で教本かなにかを配っているの見たぜ！」

話に入入してきたのは「車輛科」のAランク武偵である武藤 剛気

依頼を受けた私達が助っ人として雇ったのだ。

目的地までの移動と、必要に応じて護衛対象の移動に使う足として雇った。

彼曰く、ここ暫く一般教科の授業ばかりで腕が鈍るところだったらしい。

「お前等に付いていけば合法的に授業を抜け出せるぜ！」

「護送については任せろ！護衛対象は傷一つなく送り届けてやるからよ！」

装甲車を走らせながら意気込む彼を横目に私が地図を開く。

もう見えてきてもおかしくはない距離だ、金次くんは最初こそ武藤くんが持つてきた

雑誌や漫画を読んでいたが、目的地が近付くにつれて、窓越しに周囲を観察し始めた。

どうやら、私達以外の車が通った跡がない事に彼も気づいたようだ。

暫くすると、それらしき看板と入り口らしき道が見えてきた、その入り口の前に武装

した男が二人、私達の案内役を任されているそうで敵意は感じられなかったが、どうや

らこの二人は外部から雇われた警備員のようで『考える木』のメンバーではないようだ。

「私達の役目はここら一帯の監視と客人の案内だけなので、本館の中には入れないんで

すよ、なかの案内は別の案内役が致しますので暫く此処でお待ち願います。」

「どうやら、直ぐに依頼主と話をすることはできそうにないな。」

「私達は事前に依頼主と会う際に合言葉を用意しているが、お前達はそれを聞かされているか？」

私が一応の確認を取ると

「はい、『木を隠すなら森の中へ』でしたよね？」

確かに、案内役に使う合言葉はお互い承知しているようだ、因みに私達の返す言葉は『人を隠すなら人混みの中へ』だ。

他にも様々な質問や書類の確認等を済ませると、待つていたとばかりに正門らしき扉が開かれ和装の老人に招き入れられた。

漸く建物の中へ入った私達は依頼主と護衛対象の居る部屋に案内されることになった。

因みに武藤くんはいざとなったら直ぐに車を出せるよう、その場で待機してもらった。なにか怪しい動きがあつたら無線で連絡を取り合う。

建物の中は小さな宿舎が幾つも重なり、それが周囲を囲うように存在している。

林間学校の名残だろう体育館や食堂の他にも、キャンプ場や広場が点在している。

長い廊下の天井には燕の巣や蜂の巣ができた箇所があり、その間を通ると壁に消火栓

が掛けられている。

廊下を通りなんの変哲もない部屋の一室に入ると、そこには法衣を着て穏やかに笑みを浮かべる中性的な顔立ちをした子どもと、気難しそうな中年男性が椅子に座っていた。

もう一人、子どもの後ろに立っているのは、黒髪を短く切り揃えている20代後半あたりの女性で小太刀と薙刀を携えている、僅かな重心のずれも見られない事から、かなりの手練れであることが窺えられる。

私達が挨拶をすると

「よく来てくれた、私が君達の護衛対象である『考える木』の教祖だ。」

「君達にはこれから三日間、私の警護に当たってもらうことになるから、よろしくね。」

余りにも綺麗な声色だったため、その言葉が目の前の少女から発せられたものだとは一瞬気づかなかった。

「貴女が『花御御前』ですか？」

「思っていたより若いんだな……」

私と金次くんの質問に彼女は笑って返す。

「ホルモン異常の病気だね……発育不全なんだ。」

「これでも29歳なんだよ。」

彼女は気にした風もなく言葉を返す。

「最近では骨も脆くなつてしまつてね、キヤタツから落ちただけで足首の骨を折つてしまつた。」

「けらけらと笑つているがそれはいざというとき自分で走つて逃げられないということだろう。」

「何故、俺達に依頼をだしたんですか？」

「そもそも、なんで自分の創設した組織の幹部に命を狙われているんです？」

金次くんが話を進めようとする、彼女は困つたように頬を掻く。

「そもそも私は君達を雇うつもりはなかつたんだ。」

「彼が君達の依頼主で私の父、花御 木屑だ。」

「そう言つて、彼女が隣の椅子に座る父親を紹介すると、木屑さんは軽く会釈をして彼女が言っていることが事実だと説明した。」

「私自身は組織内の争いに部外者を巻き込むのには反対だつたんだよ。」

「しかし、父は私の事を心配して君達を雇つたそつだ。」

「命を狙われているといつても、たかだか数十人の集まりに過ぎないし。外部から人を雇うだけの金も彼等にはない。」

「君達が心配するような事にはならないよ。ああ、追いつたりはしないから安心して

くれ。3日間ここで過ごし、帰ってくれば後は学校には私が上手く報告しておくよ。部屋も用意する。」

「私はこれから用事をすませに此処を離れるから、留守は任せるよ。」

随分と軽く今後の方針を決められた私達は彼女の用意した部屋で今の状況を整理した。

「で、どうする?このまま大人しく3日間泊まるだけか?」

金次くんが私の意見を聞いてくるが、それは愚問だ。

「断じて」否だ、依頼を受けた以上は花御 咲羅の護衛は断じて続行する。例えば望まれていなかったとしてもだ。」

「彼女が出発するまで後30分程ある、15分で支度した後に、すぐに咲羅のもとまで向かうぞ。」

こうして私達の最初の任務が始まった。

あれ…武藤くんは？

探偵なんだから謎解きくらいするよ。「本当にできんのお?」できらあ!

準備を済ませた私達は改めて依頼主の木屑さんに詳しい話を聞くことにした。というのも、護衛対象である咲羅さんを完全に見失ってしまったからである。方針を決めた後、再度彼女に目通りを願ったがそれは彼女直属の部下数名に阻まれてしまった。

丁度その直後に武偵校から依頼の取り消しに対する連絡が着た、これで私達は完全な部外者になってしまったわけだ。

これから3日間は特例として各自の判断で行動することが認められ、武偵校に戻るのも特別休暇を楽しむのも自由だそうだ。私達は独自の判断で警護を続けると、仲介役の蘭豹に連絡をいれた。

誰かが外に出れば先程まで出入り口周辺の監視カメラを確認していた武藤くんが気付く筈なので、まだ敷地内にいる事は確定なのだが。おそらく隠し通路や隠し部屋などが何処かに存在すると思われる。

私達はただの客人だ、余り動き回ると他の教団員に怪しまれて最悪の場合は強制的に送り返されてしまうだろう。だからまずは金次くんと木屑さんに会って、もう一度話を

聞きたい。

先程の謁見の際は教祖の咲羅さんの手前、自由に発言させてもらえなかったようだ。今回の件でもまだ聞ける情報があるかもしれない、わざわざ民間の武偵事務所ではなく、この施設から少し離れた武偵校に依頼を出したのも気になる。

そこには絶対に理由がある筈だ。

「あ、居たぞ天羽」

金次くんが指差した方向には体育館の前で薙刀道衣の子ども達に囲まれた木屑さんの姿があった。

どうやら子ども達に稽古をつけているようだ。その邪魔をするように少し憚られるが、今を除けば次いつ話しかけられるか分からないので、今のうちになにか情報を聞き出そう。

「失礼する、花御 木屑。先程の件で確認したいことがあるのだが、少々時間を貰えるだろうか。」

敬語の使えない私が話しかけたのは失敗だったか。大人しく金次くんに任せればよかった。少し後悔しつつも私達は彼の個室に招待された。コーヒーを淹れてもらったが私は毒を入れられている可能性を考慮して遠慮させてもらった。

時刻は午前11時を過ぎており教団の託児所でも昼食をとり食堂へ向かっていた。

木屑さんは時々こうやって託児所の子ども達の面倒を見ているようだ。

「子どもと言えば、咲羅さんの事なんですが、」

金次くんが話を始める。

「失礼ですが、他に親戚や兄弟はいらっしゃいますか？」

成る程、身内から攻めるのか。

「財産分与や権利の委託についての心配は無用だ、妻が死んでから血縁は私一人だけだからな。」

確かに奥さんの姿は見られなかったな。

「何故、私達に花御 咲羅の護衛を依頼した？」

「彼女とお前の間に親子愛や組織内の上下関係があるようには見えないが。」

「寧ろ、お前達は敵対関係にあるのではないのか？」

彼は少し眉間にシワを寄せ

「行きなり何を言い出すかと思えば。私は唯、自分の一人娘の身を危険に遇わせたくないだけだ。」

「まさか私が自分の娘を殺そうとしているとでも言いたいのか？」

少し怒気の混じった声音で返答した。

「断じて“違”う。寧ろ命を狙われているのはお前だ花御 木屑。」

「否、今は『花御御前』と呼ぶべきか?」

木屑さんは明らかに動揺した様子を見せた、どうやら私の勘が当たったようだ。金次くんも私の話についてこれていないようだ。当然だろう、唯の下手くそな誘導尋問ではないのだから。

「何時から、いや。どこまで気づいている?」

正直、ほぼメタ読みなので説明しづらいが

「気づいたのは先程の答えでだ。私が最初に疑問に思ったのは花御 咲羅の年齢について。」

『『考える木』ができたのは今から30年ほど前の筈なのに教祖の咲羅さんは27歳だと
言っていたな。だから彼女の話に偽りが無いとしたら、最低でも一度は組織のトップが
入れ替わっている事になる筈だ。』

「では、誰が最初の『花御御前』だったのか。私は当初お前がこの組織を立ち上げ、影か
ら操っているのだと思っていたが、実際は違った。」

「お前と咲羅の関係について、私が親子愛という単語を出したとき少しむきになったで
あろう?」

「ここからは私の勝手な推測でしかないが咲羅の母親が最初の『花御御前』だったのでは
ないか?」

「確か20年以上前にこの教団には麻薬密造の容疑がかけられていたが結局のところ証拠はあげられずに終わった。それは何故か、その時は既に麻薬の密造から手を引いていたからだ。」

「では何故麻薬の密造から手を引いたのか、それは当時麻薬の密造に手を染めていた咲羅の母親が死んだからと仮定する。」

「続いて何故死んだのかだが。麻薬に溺れた『花御御前』が育児を放棄し自分の娘に虐待を繰り返していたとしたら、花御、咲羅の発育不全の理由にも説明がつく。」

「骨も異様に脆いようだし、おそらく彼女を妊娠していた時には既に薬物に手を染めていたのではないか?」

「そしてお前はそんな妻から子どもを護る為に自ら妻を事故に見せかけて殺し、その証拠を揉み消した。当時は警察も麻薬密造の証拠を掴むために確実な証拠が見つかるまでは軽率に動けないことが災いしたんだろう。咲羅はその時の事を子どもながらに覚えていて父親に強い憎しみを抱いていた。」

「そうして時が経ち、『二代目花御御前』として地位と力を得た彼女は父親の殺害を企てていたが何らかの事態が起きてその情報が漏れてしまった。」

「あの客室で咲羅の後ろで武器を携帯していた女性、彼女はお前の薙刀道場の門下生ではないのか、鍵付薙刀なんてものを扱っていたぐらいだからな。彼女は咲羅を守ってい

たのではなく監視していたんだ、咲羅が強行策にでないように。」

「お前は実の娘に殺されるのを恐れた、彼女に自分と同じ過ちをしてほしくなかったんだらう。」

「だから自殺することに決めたんだな、私達に3日間彼女の警護を依頼したのは身辺整理の邪魔を咲羅にさせないためだ。」

私の考察を聞いた木屑さんはずつと押し黙っている。

ひよつとして私の推理ショー大コケした?

「今の話は本当なんですか、木屑さん。」

終始、私のとなりで固まっていた金次くんがワトソン役として話を続けてくれた。

よかった。私の推理の大穴とか見つけられた訳ではなさそうだ。

「ははっ、参ったな。武偵と言っても強襲科の一年生にはバレることはない和高を括っていたんだが……」

これは、白状したということだよいのだらうか?

いいよね、ね、ね。

「自首してください木屑さん。事情をすべて知れば咲羅さんもきつと納得してくれますよ。」

いいぞお、金次くんそのまま西村京〇郎サスペンスばりの説得術で改心させちゃいな

証拠がないことに關して突つ込まれる前にS A ☆

「いや、私はもう疲れた。彼女が麻薬に手を染めたのは私が学校の運営に失敗して職を失つてからだ。そしてその責任を全て現代社会に押し付けて、私と同じような者達を集めて団結し新しい生活を始めようと意気込んだはいいも。」

「家族もろくに養えなかつた癖に、他人の事まで救える筈がなかつたんだ。『考える木』なんて団体を創つたが、私はただ家族に重荷を背負わしてただけだつたんだな。」

どうやら彼はまだ自殺を諦めてはいないらしい。

ふざけるな。

「花御 木屑、お前は愚かだ。」

私の心ない言葉に二人が息を飲むのがわかる。

「娘を守るために妻を殺した?」

「よくそんな浅はかな考えで学校の運営が出来たな。否、出来なかつたからお前は今此処にいるのか。」

「お前はただ、自分が責任から逃げたかつただけにすぎない。」

「そうして今度は自殺して責任から逃れるつもりか?」

娘を一人残して。

一方その頃

武藤 side

金次と天羽さんが建物の中に入ってから俺は警備員の長澤さんに頼んで辺り周辺の監視カメラの映像を確認していた。

といっても外を写す映像は僅かしかなく、交代で周囲を見回ったり業者や信者の対応、他には壁や看板の修理、害虫駆除に庭の剪定が警備員の仕事に含まれているそうだ。

「まさか依頼が御破算になるとはなあ……」

武偵校には既にキャンセル料が振り込まれている。

もう俺達が此処に留まる理由はないが人の命に関する依頼であった以上あの二人が簡単に手を引く筈がないだろう。二人がまだ中から出てこない以上は俺も自分の役割に専念する必要があるだろう。

「と言つても、俺は中に入れねえし二人からの報告を待つしかやるのがねえんだよな……」

俺が欠伸を噛み殺しながら流れる映像を眺めていると、長澤さんと守木さんが缶コーヒーを奢ってくれた。

この二人とは車の駐場所まで案内してくれた折に仲良くなった。

「どうやら二人とも此処では長いらしく、昔はこの近隣にあつた学校で働いていたらしい。」

「あざっす！二人はこれから休憩つすか？」

暇なら話し相手にでもなつてもらうか、この組織の情報とかを聞けるかもしれない。

「ああ、昼飯食つてからはキャンプ場の薪を割りに行かねばならんがお、それまでは暇じゃよ。長澤はどうじゃ？」

「俺も昼から蜂の巣駆除を頼まれているが、一時まで休憩だ。どっかに移動する時は他の警備員に言つてくれや。」

二人ともこれから昼休みのようだ。

「ちよつと聞きたい事があるんすけど。この『考える木』って組織は具体的にはどういう政策をもとめてるんですか？」

「自然保護の政策ならもとより国が取り組んでいるでしょ？」

「聞いた限りだと反社会的思想だとは思えないんすよね。」

俺が気になったのは『考える木』が何を目的にした集団なのか、それが知りたい。

長澤さんと守木さんはしばらく悩んだのちに口を開いた。

「武藤くん、君は花咲か爺さんを知っているか？」

「そりやあ知つてますよ。子どもなら日本昔話とかで馴染み深いんじゃないっすか？」

なんで急にそんな話を始めたのかと疑問に思っていたが、長澤さんの次の言葉に俺は耳を疑った。

「信じられないかもしれないが、その花咲か爺さんの子孫こそが歴代の『花御御前』なんだよ。」

花御御前の祖先は嘗てこの周辺にあつた集落の外れで暮らしていたそうだ。その家は先祖代々灰買いをやつていてなこの山も元々は灰山として利用していたらしい。

その山の樹木はいくら切り倒しても1年も経たずに新たな木が生えてくるので生活に困ることがなく、村の人間も質のいい灰が安く手にはいるのでその一家に感謝して暮らしていたが、それをよく思わない者も多くいた。

そんなある日、山火事が起きて偶々他の村に灰を売りに降りていた祖父と孫を残して一家は焼死してしまい。更に山火事の咎められ土地を手放さなければならなくなった。

しかし、それから山からは生気が失われていき雑草すらまばらにしか生えてこなかった。そこを偶々通りかかつとある大名が話を聞きつけ山火事を生き残った老人になにか上手いてはないかと訪ねれば。老人は家族の遺灰の入った壺をとつてきて灰山に撒

いたところ忽ちに新芽が生えていき枯れていた木々には季節外れの桜が咲いた。

これに感動した大名はその家に花御の名字を与え、その山の管理を任せた。

それが事実だとしたらおそらく超能力（ステルス）の一種なのだろう。

「じゃあ、今の花御御前もそれと同じことができるんすか？」

俺の質問に二人は頷いた。

「俺達は初期のメンバーだからな、先代の灰桜さんの頃から務めてる。」

「前に花御家の人間が1ヶ月ほどこの山を離れた時に木々が腐り始めたのを見たからなあ。」

「たしか麻薬密売の容疑で木屑さんが連れていかれた時だったかなあ。」

「あの少し前に灰桜さんが行方不明になって娘の咲羅さんが一時期警察に保護されてたんだよ。結局、灰桜さんも見つけられないまま捜査は打ちきられた。」

咲羅さんが戻ってきたら元通りか

「話してくれてありがとうございます、中の二人にこの話伝えてきますね。」

俺が車に戻ろうとした時、監視カメラの映像に二人の女性が駐車場へ向かうのが見え

た。

「少し様子を見てみるか。」

俺が車に戻って二人からも情報を引き出そうと駐車場に向かったところ。

そこには薙刀を持った女性が拳銃を構えていた女性の腕を縦に切り裂いた場面を目撃した。

「お前らなにしてんだ！」

俺がコルトパイソンを構えて二人を引き離そうとした瞬間

腕を切られた女の足元から桜の大木が地面から勢いよく生えてきて彼女もろとも飲み込んでしまった。まさか今の女が花御前か？

大木はまるで意思を持つように枝を鞭のようにしならせ、まだ斬りかかろうとする薙

刀レディ（仮）を弾き飛ばした。

俺も咲羅さんに当たらないよう2〜3発程銃弾を撃ち込んだが案の定効果は薄い。

俺が金次達に状況を伝える為に無線を繋ごうとしたところ、大木は俺達の乗ってきた装甲車を掴み俺めがけてぶん投げた。

「ちよつと待て、轢き殺される!!」

化物の退治は俺の仕事に含まれていない。

俺は一か八か地面に伏せてそれを回避し、最強コンビに助けを求めた。

「まるでピクニックだな」お花見編

武藤くと連絡がつかない、外でなにかあったのか？

「私が外の様子を見てこよう、金次はここで木屑を監視しているがよい。」

おそらく武藤くんの近くでなにか起きたんだろうが、咲羅さんの居場所もわからないし、それと関係しているのか？

私が部屋を出た瞬間、死角から刃が迫ってきた。

「気配の消し方だけは中々のものだったぞ。」

自動反撃 四本貫手

急所を外しているとはいえ決して軽傷ではないだろう一撃を受けた相手は、それでも尚小太刀を振り抜いた。

「痛みを感じないのか？」

私の顔面に振るわれた刃は弾かれ廊下に転がる。それでも暴れ続ける男の首を絞め落とし、床に寝かせる。

それにしても異常な程我慢強い男だったな。内臓は避けたとはいえ鳩尾と右胸あたりには手刀を刺したのだから呼吸するだけでも激痛が走っただろうに、まさか薬でもやつ

ているのか？

「これは、蜂に刺された痕だな。」

首を絞めた際に注射をうたれた痕のような傷を見つけたからもしやと思っただ。どうやらただの覚悟決めた奴だったようだ。

武藤くんもこんなのに襲われたのだろうか。だとしたらそりや悲鳴もあげるだろう。

武藤くんがいるであろう駐車場に近づくにつれ襲いくる信者も増えてきたが先程の男との攻防を考慮して分銅鎖による拘束からの手刀（峰打ち）で気絶させて行く。

途中蜂の群れに襲われたが蜂の針程度は受け付けないので問題ないし、消火器をもちいて蜂を撃退する警備員のおじさんが暴徒とかした信者を制圧していたのでそちらのカバーは任せることにする。

駐車場に着くと、そこにはまるで生きてるように枝や根を蠢かしている桜の木とそれを手斧で薙ぎ倒そうと奮闘する警備員達、咲羅さんの側に控えていた女性が薙刀を振り回して武藤くんを襲っている。

いや、どういう状況？

「断じて」私の仲間に手を出すことは許さん。」

とりあえず武藤くんの安全を確保するために薙刀女の相手をしようと分銅鎖で武器をとりあげようと試みるが腰の脇差しにより阻まれる。

私の裏（正）ヒロイン束縛術 囲い（キープ）をいとも容易く攻略してしまうとは……
やっぱりネーミングセンスないな、私。

あまり強い相手に自動反撃をもちいると手加減できずに致命傷を与えかねないので
自重せざるを得ない。

どうやら相手は標的を私に変えたようで、薙刀を上段に構えて迎え撃つつもり
のようだ。

お互いに出方を伺うが、傷でも痛んだのか一瞬相手の集中が切れた様に感じた。

例え誘いだとしても通常の攻撃では私の体に刃は通じないので、特に気にせず捕縛
為に私から踏み込む。

振り下ろされた薙刀は回避するのは困難な程速く、私の頭に直撃したが刃の方が砕か
れる結果に終わった。しかし彼女は振り下ろした勢いのままに腰の小太刀を抜刀する、
どうやらあの一瞬で私の異常性に対応したようだ。彼女は迷わず私の眼球を斬りつけ
に掛かる。

確かにそこはまずいな

「自動反撃 虎爪」

思わずやってしまったが、相手が後ろに跳んでくれたのでただの致命傷で済んだよう
だ。ちなみに相手の攻撃は目を閉じることで防いだ。

「心配するな死んではおらん。手当てをしてやるがよい、武藤。」

胸部と眼球を斬り裂かれた薙刀女の止血を済ませて私は武藤くんにあのハリー・ポッターに登場する暴れ柳のような桜の木について聞くと、どうやら咲羅さんは超能力者であの木の根元に取り込まれているという事と、その救出の為に守木さんと警備員が数名助けに向かったが木に近づけば近づく程に力が抜けていき意識が朦朧とするらしい。

おまけに幻覚や吐き気等の症状も発祥するらしく、頭を打って意識が朦朧としていたのか一番近くで戦っていた薙刀女が武装した彼らを敵と認識して暴走したらしい。

説明を聞いている間にも桜の被害に会った警備員が増えていたようだ。朦朧とした意識ではまともにも動くこともできず根や枝に貫かれていく。

根元に居るのならそこを避けて伐採すれば大丈夫だろう。

「あとは私がやる、お前は怪我人を避難させていろ。」

たしか、桜の木にはエンドルフィンという麻薬の一種？が僅かに生成されているという話を何処かで聞いたことがある。

日本人が桜の木の下で宴会を開いて盛り上がるのも、このエンドルフィンにリラックスイ効果があるからだそう。薙刀女にあの時隙ができたのもこれが過剰分泌されたことによるものとしたら。それも「花御前」の超能力によるものとみていいだろう。

桜はそもそも品種改良されることが多く、一代限りの突然変異等もよく確認されてい

る。花御家の超能力を利用してエンドルフィンを異常分泌するよう桜を改良しているもおかしくない。

敷地内に蜂の巣が多く見られたのも花粉を運ぶ蜂の習性を利用して周囲に広めているんだらう。そう考えると蜂そのものも品種改良してエンドルフィンを毒針に蓄積するよう一種の生物兵器として利用しているふしもある。

私に蜂の毒針は問題ないとしてもそれが運ぶ花粉はもちろん本体の木が直接周囲に撒き散らしている花粉を吸ってしまえば気が弛み隙が出来てしまう以上、下手に近づけないな…。

どうすれば…いい作戦が思いつかない。

なにかないのか、最高に頭の良い作戦は。

その1 周囲の車輛に弾丸を撃ち込み炎上させる。

これは論外だな、邪魔な花粉や蜂を処分できるかもしれないが、爆発による被害が咲羅さんや警備員に広がる恐れがある。

その2 武藤くんに車で突っ込んで道を開いてもらい、その後が続いて私が咲羅さんを救出する。

これも武藤くんの車が破壊されたらアウトだし、周囲と救出対象に被害が及ぶ可能性が高い。武藤くんの運転技術は信頼しているが、命懸けのギャンプルに挑むような状況

ではないだろう。

その3 金次くんを呼んで協力して対処にあたる。なんなら作戦もまる投げする。できればこれを押したいがヒスってない金次くんはここに来る前に蜂に襲われたり武装した狂信者に木屑さんを殺される危険があるので木屑さんと待機だ。

咲羅さんの目的は木屑さんを殺すことにあるとしたら、あの木や蜂も護衛が手薄になった今を狙うだろうからな。

その4 私一人でなんとかする。

考えた結果、エンドルフィンの効果が表れる前に「魔葬」で一息に断ち切り、あとは咲羅さんを引っ張り出す。

やはり「これ」（力技）に限る。

こんな頭の良い（悪い）作戦しか思いつかない私は既にエンドルフィンが回りきっているのか、もしくは脳を筋肉に侵されているのだろうか。

脳の弾丸が関係しているのかもしれない。

ともかく、被害が広まらないうちに片をつける必要があるのは確かだ。

「お前の桜には風情がないな、まだ私の相棒の方が幾分か「華」があるぞ。」

「お前の父が私達に依頼をだしたのは遠山の家と何かしら縁があると愚考するが、もし、仮に、私の推測が当たっているのだとしたら、その桜の醜悪さは「断じて」許容でき

ん。」

私は走りだし無数に襲いかかる枝や根を回し受けで斬り捌き幹を断ち切る。強度そのものは大したことはなく、「魔葬」を使うまでもなく桜の木は活動を停止した。

しかし、そこに咲羅さんの姿はない。

「根の深くに埋もれているのか？」

私より深く根を探っていくと子ども一人が通れそうな小さな穴が無数に空いており、そこから先程とは比べられない程の太木が無数に地面を盛り上げて私を地面に引きずり込みにかかる。完全に油断したが問題はない。

「断じて」無意味だ。」

自動反撃 “無慙” ノーモーションの手刀による斬撃、拘束された状態からでも肉の収縮運動を利用し密着した対象をも切断する。

といつても、分厚く固い樹木を両断するだけの威力は発揮できないので片腕を出すだけで精一杯だが、これで拳銃を握ることが出来る武藤くんが怪我人の避難を完了させている今なら周囲の車輛を爆発させることも可能だ。

私は愛銃のコルト・ディテクティブを全弾ガソリンタンクに撃ち込み爆発炎上させる。

爆発の衝撃程度なら私の身体はダメージを受けないが、窒息死だけは避けられない。

衝撃で緩んだ拘束を断ち切り、そこから距離をとる。

「武藤、お前はここで動かせる車を探している。私は咲羅の後を追う、お前は怪我人を病院まで運ぶが良い。」

本体の桜は既に何処かに移動しているが、まだそう遠くにはいない筈だ。

私が金次くんに無線で連絡を取ろうとした瞬間、この山全体を無数の桜の木が包围した。

散らせるものなら…

金次 side

天羽が武藤のもとへ向かってから俺は天羽に拘束された木屑さんと部屋のなかで待機している間に話の続きを聞く事にした。

「あの、咲羅さんの居場所とかに心当たりはありませんか？」

「他にも最近の彼女のことと違和感を覚える事があれば調査の役に立つかもしれませんが。」

先程の武藤の悲鳴に咲羅さんが関係している可能性は高いが、天羽が向かったのならば安心だろう。

通常モードの俺が行っても足手まといにしかならんしな。

「それが、先程から鴉喰くん…私が咲羅の護衛と監視を任せた幹部との連絡がとれないんです。」

あの薙刀を持った女性は鴉喰という名前なのか…

「咲羅さんの近くにいたのなら彼女になにかあった可能性があります、最後に連絡をしたときはなんと？」

俺が問いただすと木屑さんはしばらく考えた後、妻の灰桜さんの埋葬場所を教えてくださいました。

「鴉喰くんの話では確か、妻の遺体の埋葬場所を探していたそうだ。灰桜の遺体は私人で行ったから鴉喰くんも知らない筈だ。」

「花御家の人間は皆死んだ後はこの山に埋葬されることになっているんだ。かつて花御家の祖先がこの地に身を沈めてからずっと。」

「敷地の外れを少し行つた先に霊園を設けてあるんだが、灰桜の遺体をそこに埋めることはできなかつたんだ。その霊園には教団員の親族や友人も眠っているからね、あまり目立つことは出来なかつた。」

「だからそこを少し離れた木々の隙間に彼女を埋めたんだ。幸いと言うべきか、その辺り一面は直ぐに樹木に覆われたから私にしか正確な場所は分からないが、娘ならひよつとしてその場所を把握できるかもしれない。妻にしてもそうだったが彼女達にはこの周辺の自然環境を何らかの方法で把握する特異な能力のようなものが備わっていた。作物の収穫時期や桜の開花時期から、天候や虫や動物の生息場所、その活動範囲と時間帯までも正確に言い当てた程だ。」

もし仮に、彼の言うとおりに咲羅さんが自分の母親の埋葬場所を探しているのだとすれば。

「何で今になって急に動き出したんだ……父親の殺害計画となにか関係があるようには思えないが。」

とにかく天羽に連絡を取りたい、武藤の安否は勿論だが先程から外の様子が明らかにおかしい。

俺が外の様子を確認しようと窓を開けようとすると武藤から連絡がきた。

「武藤か！お前無事だったんだな、天羽はもう着いたのか？」

「ああ、お陰で命拾いしたぜ。今は蜂の群れから隠れて連絡してる、お前も外には出んなよ！刺されたら意識乗っ取られるぞ！」

「蜂だあ？」

窓の外を見てみるとグロテスクな程大量の蜂が窓を埋め尽くしていた。

「これはSAN値チェックものだな。」

下手すりゃ換気口から侵入される恐れもあるな、気休めにしかならんだろうがガムテープで隙間を塞いでいる間に武藤と情報の共有を行う。

「とにかく、そっちに護衛対象の咲羅さんがいるんだな？」

「もう姿は確認できないがな、あの奇っ怪な桜の木が咲羅さんを呑み込むのが見えた。」

そのすぐ後に蜂の群れが暴れだしたような気がする。負傷者も多いがあの化け桜（仮）は天羽さんが一人で抑えてる、なんならあのまま倒せそうだぞ。というか、負傷者の殆どが天羽さんに倒された奴等だ。」

だろうな、前に一度何で分銅鎖なんて扱いづらい武器を選んだのか本人に聞いたら手刀での峰打ちが難しいとか訳のわからん答えを返されたくらいだ。あいつの自動反撃（オートカウンター）は不意打ちにも有効らしいが自衛に特化している為か死角や意識外の攻撃に対しては加減が出来ずに致命傷を与えてしまう事があると言ってたからな、そいつらもその餌食になったんだろう。

「あまり余裕がないから要点だけ言うぞ。おそらく咲羅さんの狙いは父親の木屑さんの命だ。お前の話では咲羅さんに蜂を操る能力も備わっている可能性があるが、このままだと換気口や部屋の隙間からいつ蜂が入ってきてもおかしくない状況だ。流石に木屑さんを守りながらこの数の蜂を捌くのは無理だ、そっちが片付いてもまだ蜂が襲ってきたら最悪の場合、咲羅さんとは別に蜂使いがいる事になる、気をつけろよ。ああ後、天羽がやり過ぎないように見張つといてくれ。」

「最後のはともかく、他に怪しい動きをしている奴がいたら連絡するぜ。そっちに長澤っていう警備員が防護服を着て蜂の駆除に向かったからそれまで気合いで耐えやがれ。俺も動かせる車を見つけ次第負傷者の回収に向かう、ところで車輛科に借りた装甲

車の修理費用なんだが……」

俺は無線を切つて木屑さんの拘束を解いた、彼もある程度は自分の身を守れる筈だ。「もう暫くしたら警備の人が駆けつけてきますから、それまで持ちこたえましょう。」

カーテンを切つて換気口の隙間に詰めたり、肌を覆つていれば少しはましだろう。虫除けスプレーだけじゃ心許ないからな。そうこうしているうちに扉に人影が見えた、武藤の言つていた長澤さんか？それを確認する為に近づくと人影は扉を蹴破つて入つてきたと同時に刀を振り下ろしてきた。

俺は咄嗟に後ろに飛び退きベレッタを構えると、そこには中太刀を片手で突きだした状態で構える武骨な容姿をした男が立っていた。

「何者だ、警備の人間じゃあないな。」

身に纏うボロから見える肌には幾重にも切り傷がついており、刀の切つ先に揺れが見られないことから相当の達人であることは明らかだ。

「ふん、御主もしや遠山の血筋か？」

「よもや、此度の代で合間見える事になろうとはな。」

「我が名は遠山 景善、訳あつて木屑殿の命をいただきに参つた。」

俺と名字一緒かよ、相手が何者にせよ木屑さんの命を狙っているのなら戦鬪は避けられない。先手必勝、相手の間合いに入らない内に制圧する。俺がベレッタの引き金を引

き銃弾を発射する。

「あんた一人に構っている余裕はない。暫く眠って貰う。」

手足、両肩に一発ずつ撃った弾丸はしかし相手に当たる事はなく。まるで渦潮に呑まれるように奴の構えた中太刀に吸い込まれ切り伏せられた。

「眠るのは御主の方だったな、小僧。」

驚く間もなく、景善は俺との間合いをつめて刀を振り上げる…

「やはり、返對しなければその程度か…少しは期待したんだが。」

それを最後に俺の意識は絶たれた。